

看護用具の工夫

— 膠原病患者の寒冷への対処を考える —

6階東病棟

○高橋祐三子 西川三重子 川田 宣代

浜田 早苗 森下 由子

I はじめに

膠原病とは、全身の結合組織に系統的に、フィブリノイド変性をきたす疾患で、若い女性に好発し、寛解と再燃を繰り返し、慢性的な経過をとる。昭和62年度における当病院第2内科での入院治療者は、20名を数えている。

自覚症状としては、発熱、関節痛、レイノー現象、紫斑等があり、薬物療法と、日常生活での憎悪因子への配慮が必要とされている。中でも、寒冷曝露により、レイノー現象、関節痛などの症状が憎悪することが言われており、この様な患者に対して、アンカ、電気毛布、湯タンポによる保温を行っていた。これらの物品は、ベッドの中で主に用いる物である為、患者の行動は、臥床中心になりがちであった。そこで、部分的に保温用具を用いれば、寒冷曝露を避け、疼痛が軽減し、活動しやすいのではないかと考え、保温用具を作成し、実施したので報告する。

II 研究期間

昭和62年6月～昭和63年1月

III 対象及び方法

1) 対象

上記期間中に6階東病棟に入院していた、関節痛のある膠原病患者4名

表I 患者紹介

患者	年齢	生別	職業	症状 (主な痛みの部位)
A	56	女	教師	全身関節痛 (膝, 腰, 肘)
B	24	女	家事手伝	レイノー現象, 全身関節痛 (足, 手, 膝)
C	38	女	主婦	全身関節痛が時折みられる (肘)
D	38	女	主婦	レイノー現象, 下肢関節痛 (膝)

2) 方法

対象患者に共通している事は、入院時、関節痛が増強し、日常生活に支障をきたしている状態であるという点である。そこで、特に痛みが強い膝、肘、レイノー現象の現れやすい手などに対する用具を作成した。

作成後、保温用具使用による保温効果の実験を行った。病棟スタッフ8名により、保温用具着用し、使用前後の、膝窩部、手掌部の体温変化を経時的に測定した。

次に、入院中の夏期と、退院後の冬期に、それぞれの用具を使用してもらった。

入院中は、冷房による寒冷対処を考え、用具を用いる事で、痛みに対する反応の変化を患者の訴えと行動でチェックした。

退院後は、自宅療養中の2例を対象とし、痛みの最も強い膝部に用具を使用してもらった。この際、用具の効果を調べる為、記録用紙を用いて、使用状況を記録してもらった。痛みの評価については、疼痛の最大値を10、痛みのない状態を0とし、統一された尺度を用いてもらう事にした。

		月 日 () 天気:	
気 温	体 温	脈 拍	
保 温	痛み最高(10) 0° 3° 6° 9° 9° 12° 15° 18° 18° 21° 24° 5 5 痛みはどうか? → 痛みなし(0)		
・膝用 ・肘用 ・手用 その他 <input type="checkbox"/>	使用前の痛み 使用後の痛み		
痛みを チェック しましょう	<input type="checkbox"/>		
備 考	感想・意見・気づいた事など自由に書いてください。		

図1 用具使用状況記録用紙

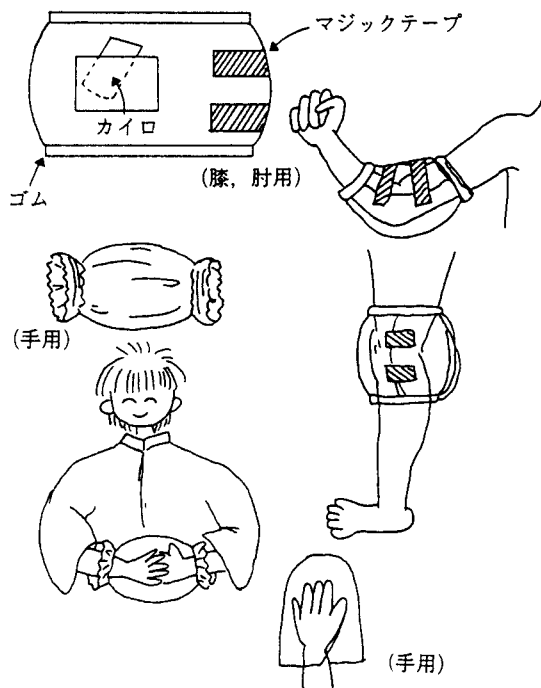


図2 用具使用方法

IV 結 果

(1) 用具の作成について

市販されているサポーターや、手袋とも比較し、用具による圧迫や、着脱等を検討しながら考えた。

用具の素材は、安価で、保温力もあるキルティングを使用し、患者によっては、カイロを携帯する者もあり、カイロを入れる内ポケットを考慮した。又、マジックテープを取りつけ、取りはずしが容易にできるよう工夫した。

(2) 保温効果の実験結果について

使用により、わずか1～2℃であるが、温度上昇があった。

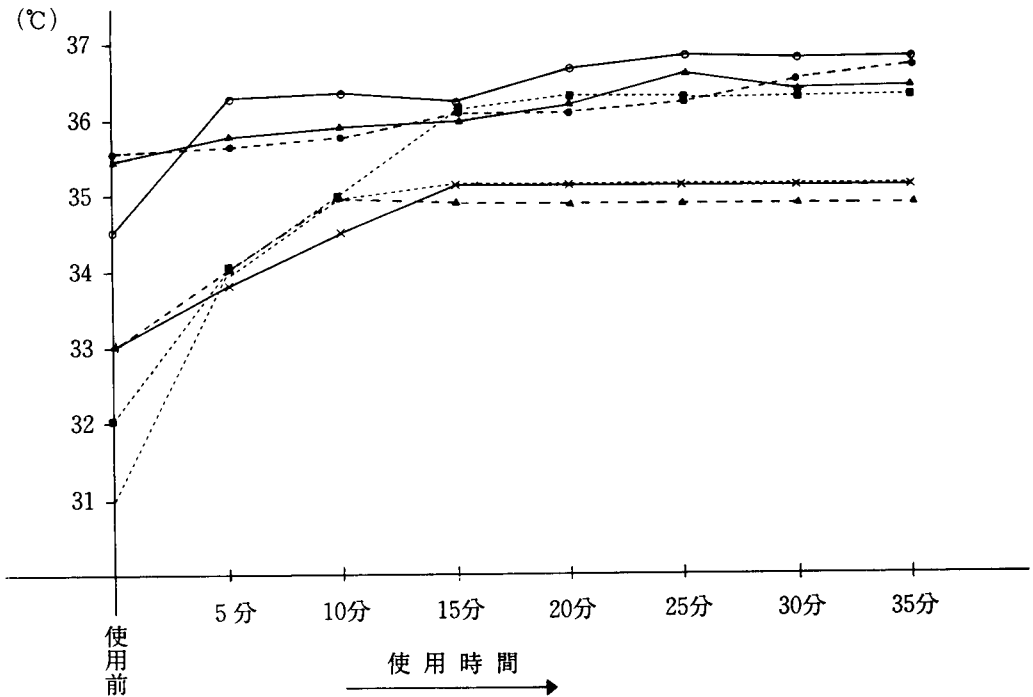


図3 保温用具使用による体温変化

(3) 入院中の用具使用について

膝用は、4症例のうち3例が使用した。うち2例は、膝関節痛が最も強かったが、使用により痛みが軽減され、毎日使用していた。又、1例は、用具を使用したまま活動できるようになった。

肘用は、1例が使用した。肘関節は、膝関節に比べ可動させることが多い。その為日中特に活動時にはあまり使用されなかった。しかし、保温の為、夜間はよく使用していた。

手用は、2例が使用した。1例は、寒冷によるレイノー現象出現の多い夜間から午前中にかけて使用していた。又、精神的緊張によっても、レイノー現象のみられた1例では、回診前などに使用し効果があった。

(4) 退院後の用具使用について

使用状況の結果、2例共、使用後は痛みが幾分軽減した。又、冬期である為、ストーブ電気マット等の暖房器具を併用することにより、相乗的効果を得た。

図4のごとく、用具にカイロを入れた方が疼痛の軽減度合いが大きい事がわかった。

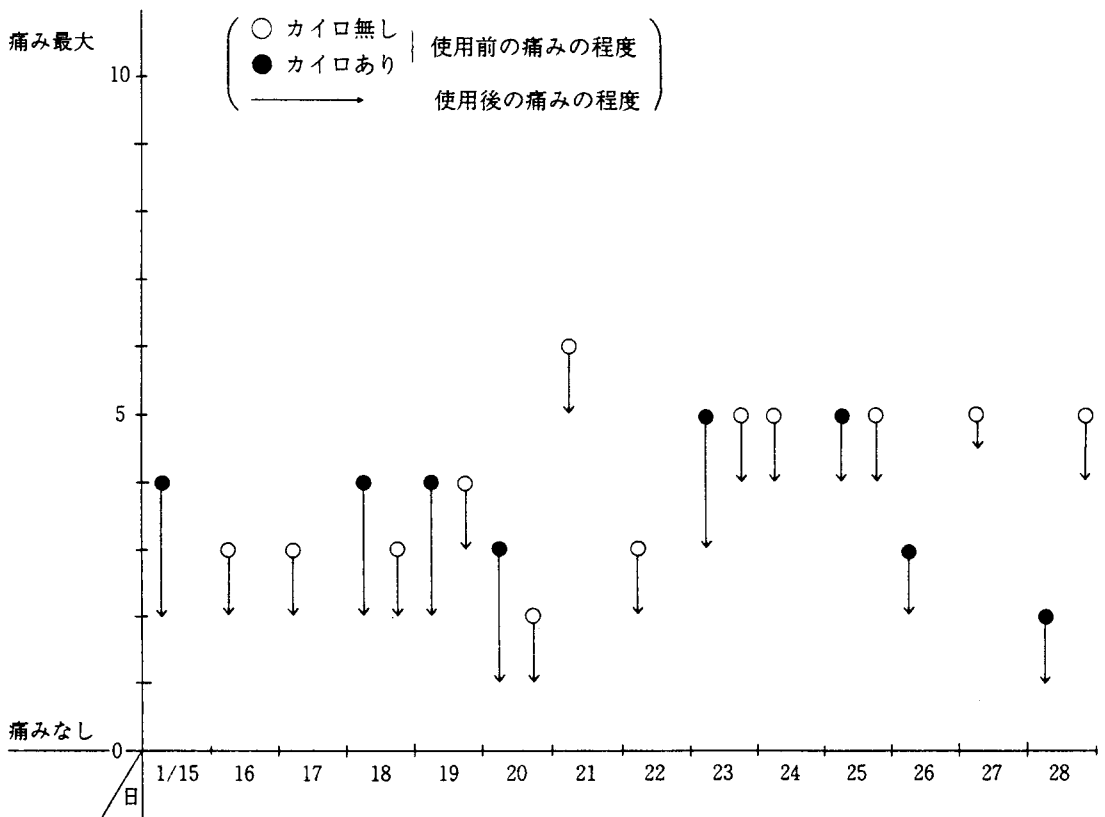


図4 用具使用による痛みの軽減度合

以上から

- ① 関節痛は保温用具により軽減される。
- ② 用具使用により、活動範囲は拡大されたが、各関節の円滑な動きには、支障をきたしていた。
- ③ 他の暖房器具の併用により、効果が上がる。

という結果が得られた。

V 考 察

膠原病患者において、関節痛があると、指先や、手先で行う動作が障害され、歩行も自由にならない場合がある。日常生活に支障をきたし、患者は痛みと共に多くの精神的苦痛にさらされる。

用具作成時の工夫により、入院中、患者側の着用感は好評であった。装着が容易で、圧迫による循環障害も少なくすることができた。又、カイロ併用により保温効果を上げる事ができたが、低温熱傷の危険性が考えられ、下着の上に装着したり、カイロ袋を新たに作る等の対処が必要であった。

保温の効果は、表面温熱の疼痛の閾値を上げる事、関節内循環を促進して、こわばりを除去する事が文献により言われている。

実際、保温用具使用下では、関節痛軽減を認め、効果があると考えられる。しかし、用具使用では、痛みを完全に取り除く事はできず、薬物療法に頼らずにはいられない面を再認識させられた。

寒冷負荷により、レイノー現象は、著明に出現し、負荷後のサーモグラフィーでは、約1℃程度の温度上昇により、消退を読みとっている例もある。このことより、作成した用具は、保温効果を得ており、レイノー現象も軽減できると考えられる。又、ベッド臥床が、最良に保温できるものと思ひ込み、従来の保温用具を手放せなかった者についても、離床時の保温が保て、活動範囲を広げる一助になったと思う。

夏期は、院内全体が冷房使用状況下であり、寒冷曝露を部分的に避ける為、用具は環境への対処として、十分役立つものであったと言える。

退院後は、保温効果を疼痛の程度を通して評価しようとした。痛みは、感じ方に個人差があり、精神的なものも関与する為、評価は難しいとされている。しかし、今回の様に、統一された尺度を用いることは、一貫した観察に役立ち、情報収集の1つとして有効であったと

考える。

今回、このような用具を作成したことで、患者個々が、自宅における用具への工夫など、寒冷に対する対処方法を重要視する動機づけになったと思う。

しかし、入院時の使用状況と、家庭での使用状況を比較検討してみると、家庭内においては、行動範囲が大幅に拡大する。その為、用具がずれやすい、外出等の際、外見が気になる等の問題が挙げられた。又、家庭においては、室内の温度調節が難しい事もあり、保温用具としては、まだまだ創意工夫が必要と思われる。

VI おわりに

私達は、看護用具の工夫を通して、膠原病患者の寒冷への対処を考えてみた。

今回、症例数も少なく、確実な効果のデータは得られなかった。しかし、看護上、用具の工夫はもとより、日常生活の様々な配慮が重要であると痛感した。

参考文献

- 1) 本間光夫：膠原病，内科 MOOK 28，金原出版，1985
- 2) 大高裕一：図説膠原病，医学書院，1976
- 3) 橋本武則 他 2 名：膠原病症例図説，大日本製薬株式会社，1976
- 4) 奥田正治：膠原病・リウマチ性疾患の臨床，メディカルリサーチセンター，1976
- 5) Margo McCaffery：痛みをもつ患者の看護，医学書院，1975
- 6) 本間光夫 他 2 名：膠原病，その理解のしかた，診かた，生活指導，医学書院，1975
- 7) 松野かほる編，膠原病患者の保健指導，日本看護協会出版会，1988
- 8) 根津進，フローチャートですすめる看護研究，学研，1987